### SMFアート寺子屋

# アートプラットフォーム形成のためのメタデザインⅢ

SMFは、2014年度から2016年度にかけて「住・衣・食」をテーマとした取り組みを展開しています。

この「住・衣・食」という順序は、人間を取り巻く環境を外側(住→衣)から中心(食)に向けて掘り下げるための構成となっています。 ちょうど三年間の中心となる2015年は、今を生きる私たちにとってのアクチュアルなアートの在り方について考え、

アイデアやヴィジョンを共有するために3つの柱を立てました。

### Vol.1 同心円的空間モデルと住・衣・食

### 2015年10月4日(日) 埼玉県立近代美術館 講座室

SMFの、この三か年のテーマは「住・衣・食」です。ただ、それらを別 べつに考えるだけでなく、ひとつのテーブルの上に位置づけられないか と思いあたったのが、「同心円的空間モデル」でした。「食」は身体を つらぬく食道にかかわり、身体をつつむものとして「衣」があり、その外側 のおおいとして「住」があります。中心に自己(無意識)をおいて、その外 側に同心円的に幾層にも重なって、都市や宇宙まで広がっていく空 間の関係をひとつの座標とすることで、「住・衣・食」にからんださまざま なことがらを位置づけたいと考えたのです。

当日は、まず私が建築の立場からのイントロダクションとし て、さまざまな部屋・家・集落に「同心円的空間モデル」を あてはめ、隣接する別の水準の空間との間の構成のしか たのなかに、それぞれの空間の固有性がみてとれること、さら に実際の建築創造のなかで、その構成のしかたを意識的 に操作することで場の活性化がもくろまれていることなどを紹 介しました。

つぎに石上城行さんからは、「美術って何?」という根本 的な問いをかわきりに西洋美術の流れをたどり、西洋の個 性重視の教育、かたや日本の美術表現では「型」が重ん じられること、さらにその先の創造的視点についての問いが 投げかけられました。

つづいて柴山拓郎さんからは、現在は五線譜の上に書 く作曲はしていないと自身の活動について紹介され、ジョン・

ケージの例もあげながら、創造することと作曲家として有名になることと の問題などについて語っていただきました。

休憩をはさんだ後半では、参加者全員の自己紹介の後、とくに若 い参加者から、現代の都市における自由な空間の欠如、SNSの世界 だけで作品を発表する意味、理科系と文化系の役割や違いなど、非 常に今日的でせっぱつまった表現のありようが議論されました。

青山恭之(SMF員運営委員)



## Vol.2 ヘンテコ音楽の社会化~音の脱衣~

#### 2015年11月1日(日) 埼玉県立近代美術館 講堂

今日、私たちは多くの音楽にかこまれて暮らしています。それらの音楽 のほとんどは、明確なリズムやメロディをもったわかりやすい音楽といえま す。そうした音楽を楽しみ、共有することは、聴き手が所属する社会集 団の結束力を強める力があります。一方、SMFで実施してきたサウン ドモンタージュワークショップで電子音響音楽を制作することには、どの ような意味や意義があるのでしょうか。第二回目の寺子屋では、だれも 義を模索しました。

古川聖さんには、「MUCCA」について映像をまじえてお話いただき ました。MUCCAは、ユーザーが自由に描いたイラストを、アプリケー ションで多くの人びとと画面上で共有し、それぞれのユーザが自分のイ ラストを画面で上下左右に動かすことで音楽が生成され、ユーザどう しで音楽を奏でることができるというユーザ参加型の音楽創作アプリ ケーションです。「参加者が表現の主役になることができるツール」を 使った表現フィールドの創生は、SMFのアートプラットフォーム形成が めざすゴールに大きなヒントとなりました。

中野昌宏さんには、「良いモノが売れるとは限らない件について」と がちょっと前衛的な音楽を作って楽しむといった場の創生の意味や意 いうテーマでお話いただきました。論理学で、p→q(pならばqである) が成立しても、g→p(gならばpである)が成立することはなく、だとすれ ば「良い物→売れる」が成立したとしても、「売れる→良い物」とはいえ ないということになります。にもかかわらず、現在私たちは「買う前に買うこ とを決定する必要性」を強いられており、そのために買うことによって得

られる期待(期待効用)を過度にあおるよう な広告が訴求力をもちすぎている現状をわ かりやすく解説していただきました。

マイク・クベックさんは、東京エールとい うビールを作る会社の立ち上げとともに、そ のビールをより多くの人びとに飲んでもらう場 として生まれたクラブ「SuperDeluxe」のフ ロデューサー/ディレクターとして、数かず の音楽イベントを手がけてきました。有名

無名にかかわらず、みずから多くの音楽イベントを見てまわり、おもしろい と思ったアーティストに声をかけながら、徐々に人が集まる場を作り上 げ、現在では単なるクラブという位置付けにとどまらない、音楽からメ ディアアートにいたる先端的な表現の場へと発展をとげた背景につい てお話いただきました。

パネルディスカッションでは沼野雄司さん(音楽学)も加わり、意見交 換がなされました。18世紀以降、アートは人びとの側に立つものとなりま した。しかし、社会からあたえられた音楽を楽しむだけでなく、少しでも 多くの人びとがちょっとヘンテコだなと感じる音楽を楽しみ、その創出に も関わるようになることは、現在の社会を活発な議論とともに前進させて いくために有用であるということを改めて再確認することができる活発な 議論の場となりました。

柴山拓郎 (SMF運営委員)



# Vol.3 北浦和食堂プロジェクト事前調査報告会&ワークショップ

### 2015年12月6日(日) 埼玉県立近代美術館 創作室

今年度の三回目となる寺子屋では、9月に美術家の増田拓史さん が北浦和西口銀座商店街で実施した調査の報告会と小さなワーク ショップをおこないました。増田さんの活動は、街の人びとに記憶に 残っている料理というテーマでインタビューを行い、やり取りを通じて見 えてくる街の歴史や特徴を明らかにするとともに、人びとの明日に何か の足跡を残すところを目指しています。

前半はまず、私からSMFと商店街との関係を簡単に説明した後 に、増田さんからはこれまでの活動と北浦和という街の印象、さらに調 査で得られたさまざまなエピソードについて語っていただきました。ひとと おり話が進んだところで、インタビューを受けて料理のレシピを提供して くださった商店街の方がたにご登場いただいて、お話をうかがいなが らの試食会がはじまりました。

「きゅうりの粕もみ」を紹介してくださった構内寛さん(横内酒店)か らはお酒にまつわる記憶と出身地の長野のようすについて、「真鯵のつ みれ揚げ」を紹介してくださった野村幸子さん(喫茶ひとやすみ)から は長崎の島での暮らし(特に魚とのかかわり)についてお話をしていた だきました。「サッポロ一番」を紹介してくださった西井戸良介さん(川 口信用金庫)からは、中学で部活動にいそしんでいた日々のエピソー ドを披露していただきました。

その他にも、みのり屋さんの「ナスとピーマンの醤油炒め」や、中華楼 さんの「広東風あんかけ焼きそば」など計5品が供され、全員で折箱に 詰めておいしくいただきました。

後半は、参加者を3つのグループに分けて、それぞれの記憶に残る 料理について語り合うワークショップを実施しました。それぞれのグルー プからはさまざまな記憶が語られ、料理をきっかけに家族や生活などへ とディープなところに話がおよんで濃密なやり取りが展開していました。 最後に、増田さんから食をメディアとしてアートプロジェクトをおこなう意

義や、これからのアートが目指すべき方向について熱く語っていただ き、今年最後の寺子屋は幕を閉じました。

石上城行(SMF運営委員)



